

P-7 骨盤内静脈瘤症に対する新しい治療
の試み—腹腔鏡下静脈瘤clipping—

神戸大, 千船病院*

武内享介, 藤田一郎, 丸尾猛

中嶋一彦*, 北垣壮之助*, 古結一郎*

【目的】性成熟期女性の慢性腰痛の原因は多岐にわたり、その中でも骨盤静脈瘤は古くから知られているが、日常臨床の中で看過される場合が多い。我々は骨盤静脈瘤が疑われる症例において静脈瘤に対する腹腔鏡下clippingを施行し、良好な治療効果を得たので報告する。【方法】数年来持続する腰痛を主訴として来院した2症例を対象とした。両症例とも第1子出産後に月経数日前より起こり、月経開始とともに消失・改善する腰痛が生じ、長時間の歩行立位により増悪する傾向を認めた。2症例とも他院にて鎮痛剤投与やホルモン療法を施行されたが、改善が得られなかった。これらの臨床症状より骨盤内静脈瘤を疑い、経膈超音波法にてその存在を確認した。個別に同意を得た後、腹腔鏡下にPIDや子宮内膜症などの他の腹腔内病変を否定後、腹膜を切開、静脈瘤を分離露出し、直視下にエンドクリップを用いてclippingを行った。【結果】疼痛はVisual Analogue Scale (VAS)にて数量化を行った。2症例とも腰痛はVASにて術前8点→術後1点、術前7点→術後2点と術直後より著明に改善した。術後3年の時点でも月経前に軽度腰痛を認めるものの、なお良好な治療効果が得られている。

【結論】骨盤内静脈瘤はまれなものではなく、腰痛の発症時期、月経周期との関連を詳細に問診することでその存在を推定することが可能である。腹腔鏡下静脈瘤clippingは骨盤内静脈瘤症に対する治療として合目的的である。本手技は開腹による子宮全摘術/付属器摘出術に比して低侵襲的であり、骨盤内静脈瘤症の外科的治療の選択肢の一つとなり得る可能性がある。今後症例を重ねその長期予後を検討する必要がある。

P-8 皮下鋼線吊り上げ法を用いた腹腔鏡
下手術における腹腔内視野と影響を及ぼす因子に
ついての検討

東京医大

保坂真、井坂恵一、藤東淳也、伊東宏絵、

小川俊隆、高山雅臣

【目的】皮下鋼線吊り上げ法により腹腔鏡下手術を施行した症例につき、腹腔内視野（視野）、術後手術操作性（操作性）、身体的要素の分析を行い、本法の有用性につき検討した。【方法】対象は、当教室にて本法により腹腔鏡下手術を行った58例で、視野および操作性を評価するためにそれぞれ5段階（視野良好Grade 1から視野確保不能5）、4段階（操作容易Aから操作困難D）に分類した。視野に影響を及ぼすと考えられる因子については、手術台の角度の変化（水平と15度のトレンデレンブルグ体位）、さらに身体的要素として10項目のパラメーターを設定し、視野との関連性について検討を行った。【成績】視野評価では、手術台の角度を水平から15度のトレンデレンブルグ体位に変化させると、Grade 1の症例は3.4%から50%、Grade 2:60.4%から41.4%、Grade 3:36.2%から8.6%と良好な視野へ変化した。操作性は、Aが41.4%、Bが51.7%、Cが6.9%、Dの開腹移行症例はなかった。操作性Cにおける平均年齢は60歳、平均腹壁厚は21mm、肥満度は36.3%であり、操作性AおよびBに比べいずれも高値を示した。また、15度のトレンデレンブルグ体位でGrade 3の軽度視野障害を示した症例においても同様に、平均年齢51.2歳、平均腹壁厚が18mm、平均肥満度33.6%と高値を示した。【結論】視野は一般に肥満（肥満度20%以上）により悪化する傾向を認めた。しかし、年齢（50歳以上）、出産、腹壁の厚さ（18mm以上）、吊り上げ高（130mm以上）なども視野に影響を及ぼす重要なパラメーターになりうる事が確認された。また、術後の操作性評価による実際の視野に関しては、手術台の変化により全例において手術操作には十分な視野改善が認められた。